一般国道368号線道路改良事業に伴う

西　横　尾　遺　跡

―― 上野市安場字西横尾 ――

１９９５・３

三重県埋蔵文化財センター

序　文

埋蔵文化財は、それぞれの地域の、そして我が国の歴史を明らかにする上での重要な歴史史料です。また同時に、後世に残さなければならない、私たち共通の大切な文化遺産でもあります。したがって可能な限り現状を保存してゆくことを大原則としておりますが、私たちの社会生活を向上させるための各種の公共事業もまた重要であることは言うまでもありません。そこで、どうしても現状保存の困難な部分については、発掘調査を実施し、記録の保存を図ってきているところであります。

ここに紹介致します西横尾遺跡の発掘調査結果も、県道改良事業に伴って止むなく実施されたものです。この発掘調査成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県土木部・各関係事務所及び上野市教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝致します。

平成７年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　川　村　政　敬

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が三重県土木部から執行委任を受けて実施した、一般国道368号線道路改良事業に伴う、上野市安場字西横尾に所在する西横尾遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は、下記の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
主事　　小　林　　秀
主事　　宇　河　雅　之

3．調査にあたっては、県道路建設課、上野土木事務所、上野市教育委員会、ならびに地元の方々のご協力を得た。

4．発掘調査後の出土遺物の整理は、調査担当者の他、管理指導課が行った。

5．本書の執筆・編集は、小林が担当した。

6．挿図の方位は、全て真北を用いた。なお、当地域の磁針方位は、西偏6°20′（昭和55年）である。

7．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8．遺物実測図の番号は、写真図版の遺物番号と対応させてある。

9．本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

ＳＫ：土坑　　ＳＺ：不明遺構

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 1
Ⅲ　調査と成果 …… 3
Ⅳ　結　語 …… 5

図　版　目　次

ＰＬ．１　作業風景・調査区全景
ＰＬ．２　ＳＸ３全景

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡地形図
第３図　調査区周辺地形図
第４図　遺構平面図
第５図　ＳＸ３平面図・立面図
第６図　出土遺物実測図

Ⅰ．前　　言

1．調査に至る経過

三重県教育委員会では、国および県にかかる各種公共事業に関連して、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めてきているところである。

一般国道368号線道路改良事業地内に所在する西横尾遺跡は、平成３年度の事業照会に伴って分布調査を行い、その時点では古墳の可能性があるとして報告された。その後368号線道路改良事業が具体化されるなかで、平成５年度に当センターが試掘調査を実施した。その結果、若干の遺物とともに小規模な石組みが発見され、遺跡であることが確認された。

西横尾遺跡の取り扱いについては、その保存も含めて県土木部および上野土木事務所と協議を重ねてきたが、この道路が地元の生活にとって必要不可欠であるとの判断から、やむをえず事前の発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成６年５月16日から開始して、同年５月25日に完了した。最終的な調査面積は200㎡であった。

なお当遺跡の名称は、分布調査時の段階では安場古墳と命名されたが、当遺跡の所在する小字名から西横尾遺跡として報告することとする。

2．調査日誌（抄）

５月11日　上野土木事務所と現地協議。本調査の範囲を決定する。

５月13日　発掘資材の搬入。

５月16日　表土を重機で除去する。

５月17日　遺構検出を開始する。遺物を伴う土坑を２基と、小石組み遺構を検出する。

５月19日　小石組み遺構の精査、及び埋土掘削を開始する。

５月23日　調査区の掃除と、全体および遺構個別写真の撮影。

５月24日　遺構実測と調査区の地形測量。

５月25日　小石組み遺構の実測と断ち割り。発掘資材の搬出。調査完了。

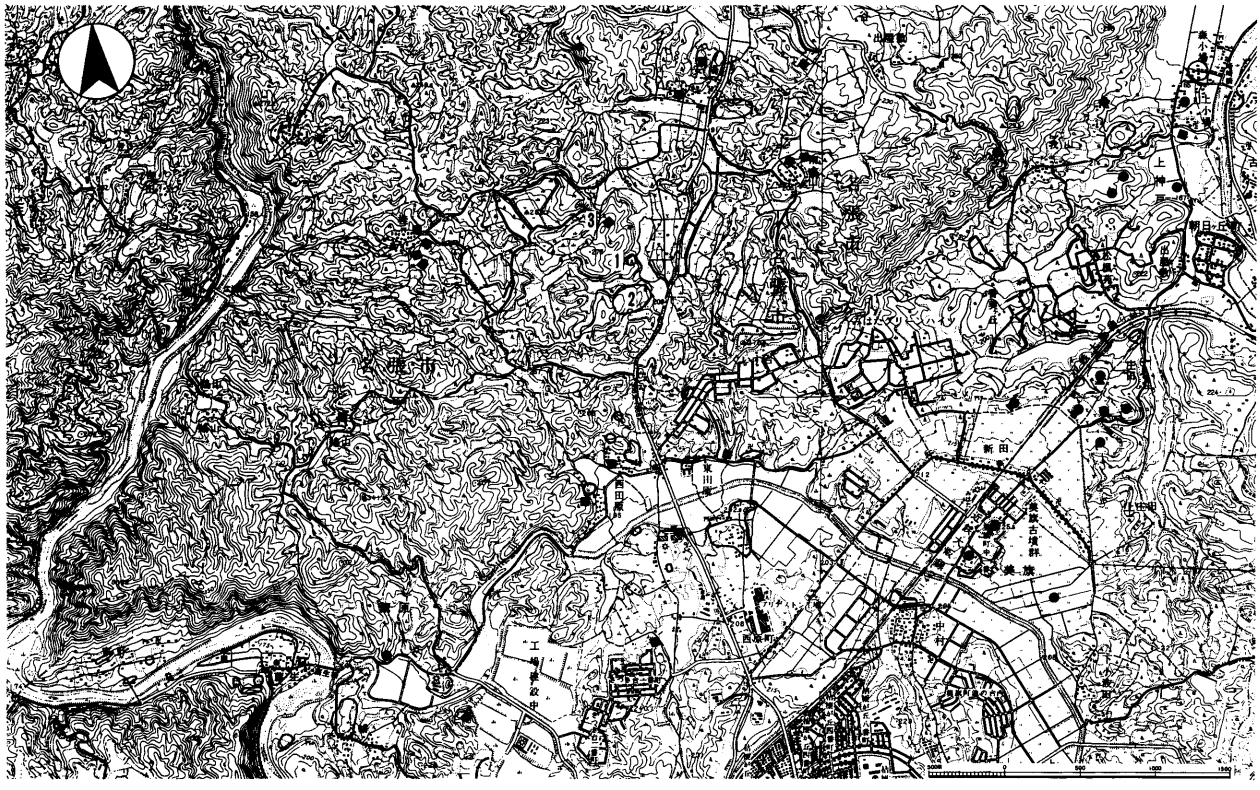
Ⅱ．位置と環境

西横尾遺跡(1)は、現在の行政区分では、名張市との境界に近い上野市安場字西横尾に所在している。位置的には安場の集落からやや隔たった、南の丘陵先端部にあり、近くをいわゆる「名張街道」、現在の国道368号線が走る交通の要所である。遺跡の東の谷間には、かつて横尾川が南北方向に流れていたが、近年の農地整備事業によって現在は消滅している。

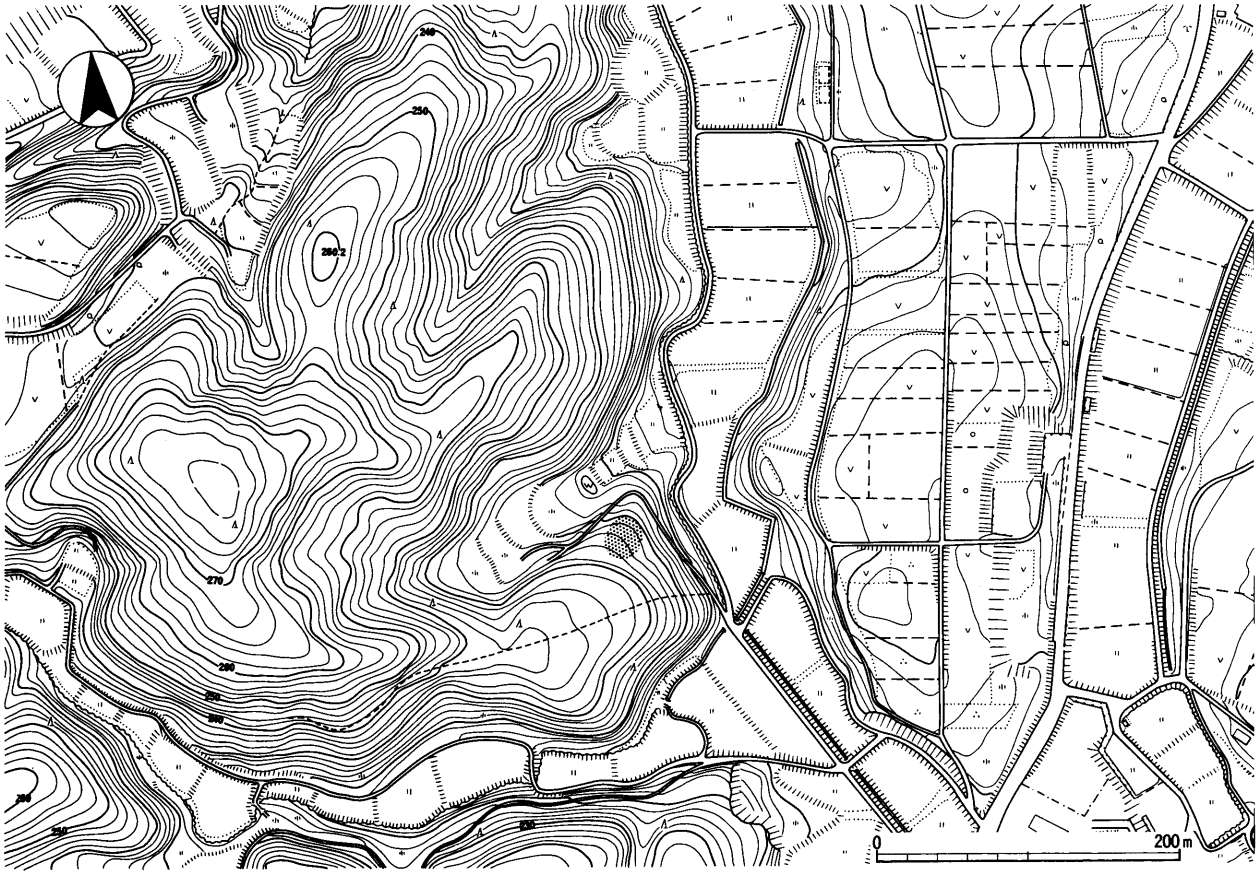
周辺では、中世城館跡等の遺跡の存在が幾つか知られている。

まず、当遺跡が立地する丘陵から谷を隔てて南側に隣接する横尾遺跡(2)では、以前から瓦器などの遺物の散布が知られていた。また当遺跡の北側の丘陵斜面上には、若干の平坦地が連なった横尾宅跡(3)ある。ここは、地元では安場集落の故地と伝承されている。

しかし、周辺の丘陵部分については、若干の中世城館の存在が目につくものの、決して遺跡密度の濃い所ではない。遺跡の分布は、美旗古墳群に代表されるように、むしろ国道368号を南に抜けた、若干開けた盆地部分に多い。このことは、盆地部分の開発が比較的早い段階で行われていたことを示すとともに、西横尾遺跡周辺域の丘陵の開発が、中世以降を中心としていたことを示唆している。



第１図　遺跡位置図（１：50,000）



第２図　遺跡地形図（１：5,000）

Ⅲ. 調査の成果

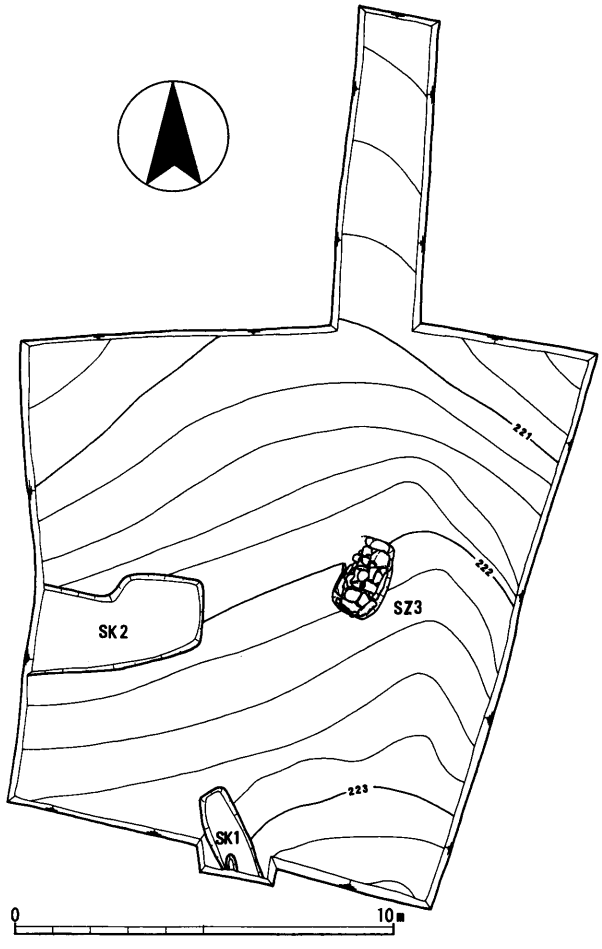
調査区は、丘陵尾根上のわずかな平坦地を中心に設定した。また北側へはトレンチを入れて、遺跡範囲の確認を行った。

遺構の検出は、やや粘土質の赤褐色の地山で行った。遺物包含層はなく、地山面には若干の腐食土と表土の直下で達する。地形的に土砂は常に流出していたと考えられ、このため遺構の保存状態もよくなかった。

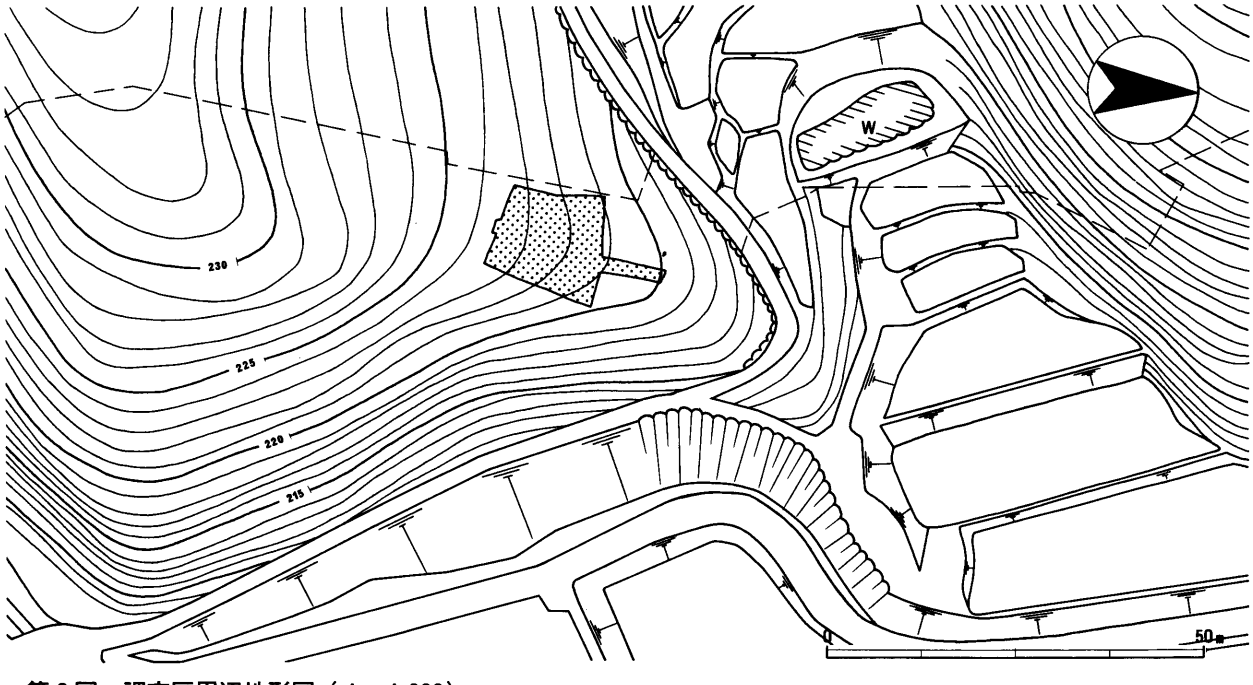
(1) 遺　構

ＳＫ１　樹木の根で大きく攪乱されており、形状については不明瞭であった。遺構の深さは、検出面から20㎝程である。土師器の羽釜片や小皿片がややまとまって出土したが、遺構の性格については不明である。

ＳＫ２　長さ約４ｍ、幅約２ｍの土坑である。調査区の西へ広がる可能性が強いが、事業地外であるため確認できなかった。埋土には、いずれも小片であるが、瓦器椀を中心に、陶器や土師器片がかなり含まれていた。しかし遺構の深さは非常に浅く、北側の最も深いところで10㎝程であった。流れ込みの可能性もあり、遺構の性格については不明である。



第４図　遺構平面図（１：200）



第３図　調査区周辺地形図（１：1,000）

出土遺物の時期は、13世紀後期が中心である。

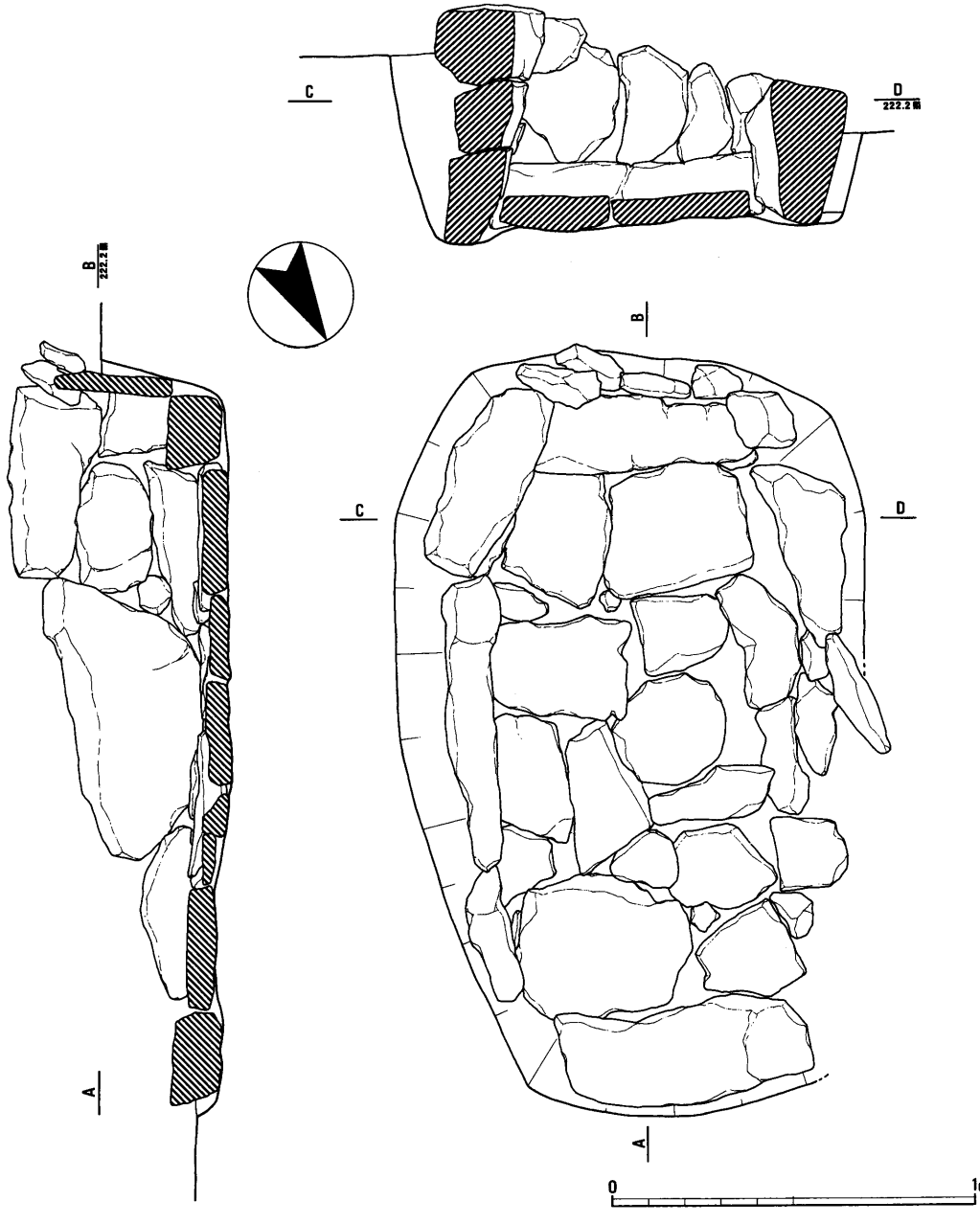
ＳＺ３　北側が破壊されているが、現状での規模が長さ約２ｍ、幅約１ｍの小規模な石組みである。側石には偏平な石が使われ、その傾向は特に南側短辺の側石に顕著である。このことから、天井石は置かれず、当初からオープンの状態であったと考えられる。

床面には、比較的大きく、ほぼ均一な厚さの偏平な石が、掘り方底面に接して敷かれている。しかし、南北の短辺には厚みのある長い石が置かれており、意図的に床面に段差をつけたものであると判断される。

床石の間には、炭化物を多く含んだ灰が詰まっていた。このため何かが燃やされたことは確実だが、石はいずれも焼けておらず、他所で燃やされた灰と考えられる。

石組みの性格については不明である。墓の可能性もあるが、遺物は瓦器椀片がごく少量出土したのみで、そのことを積極的に裏付ける事はできない。遺跡の立地から、宗教的な性格の施設であった可能性もある。

遺構の時期は、出土遺物から概ね13世紀の後期頃



第５図　ＳＺ３平面図・立面図（１：20）

と考えられる。

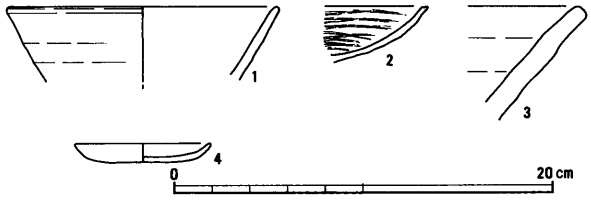
(2) 遺　物

出土遺物量は少なく、整理箱に換算してわずか1箱であった。しかも、いずれも小片で、図示できるのは4点のみである。

4は土師器の小皿である。ＳＫ１から羽釜片とともに出土した。口径約7㎝、器高約1㎝。胎土は淡褐色で緻密であるが、焼成はよくない。磨耗が著しく、調整法は不明である。

3と1はＳＫ2からの出土である。3は、藤澤良祐氏のいうところの尾張型[1]の片口鉢で、知多産の可能性が高い。胎土は粗く、最大5㎜程の砂が多く含まれている。焼成は良好で、白灰色を呈している。

1は青磁椀である。胎土は緻密で焼成も良く、灰色を呈している。釉の色はやや灰色がかった濃緑色で、非常に薄くかつ均一に施されている。越州窯系と考えられ、ＳＫ2の出土遺物の中では、時期的に最も古い。



第6図　出土遺物実測図（1：4）

2はＳＺ3出土の瓦器椀である。ＳＺ3出土の遺物の内、図示できたのはこの1点のみである。口縁端部に沈線をのこすものの、外面はユビオサエでミガキはなく、内面のミガキも太くて粗い。13世紀の末期頃と考えられる。

Ⅳ. 結　　語

今回の調査では、ＳＺ3以外に顕著な遺構が検出されず、遺跡全体の性格を考える材料を欠いている。しかし、狭い丘陵の尾根上に立地していることから単なる集落跡とは考えられず、墓地や信仰・宗教的な要素を想定する必要があろう。

ＳＺ3のような中世の石組み遺構については、県内でもほとんど知られていない。類似したものとしては、1992年に調査された一志郡美杉村上多気の大蓮寺跡[2]で5基、本年度調査の名賀郡青山町伊勢路の六地蔵Ｂ遺跡で1基が検出されている。この内、大蓮寺跡のものは、短辺の一方が開口し、床も石敷されていないなどの大きな相違点がある。また時代も16世紀と新しく、やや隔たっている。

それに対し六地蔵Ｂ遺跡のものは、床に敷かれた石が拳大前後で小さいこと、床面に意図的な段差がないことなどの若干の相違点はあるものの、非常に類似したものとして注目される。遺構の性格についてはやはり明瞭ではないが、今後類例の増加に期待したい。

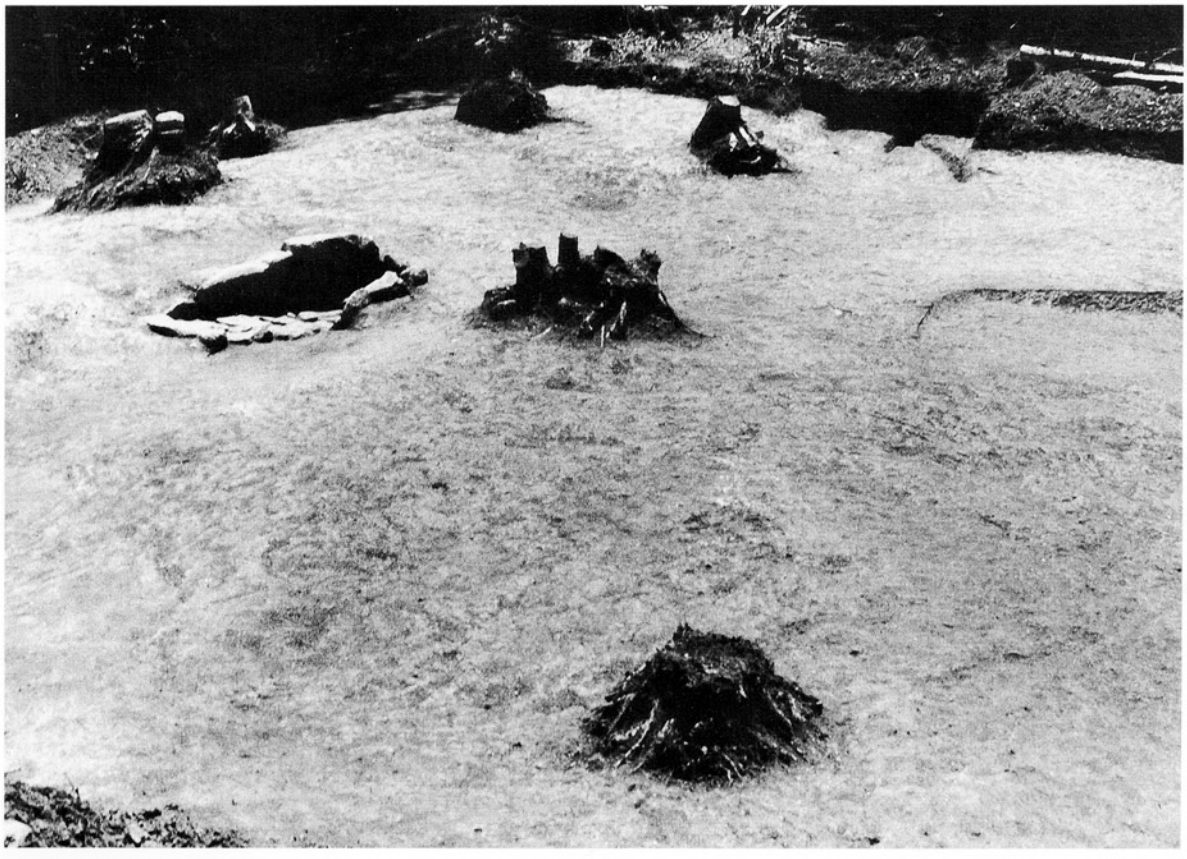
〔注〕

① 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』 三重県埋蔵文化財センター　1994年

② 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993年

PL. 1

作業風景（北から）



調査区全景（北から）

ＳＺ３作業風景（西から）

ＳＺ３（西から）

報告書抄録

ふりかな	にしよこおいせき
書名	西横尾遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告
シリーズ番号	130
編著者名	小林　秀
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川503
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりかな 所収遺跡名	ふりかな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西横尾遺跡（にしよこお）	三重県上野市（みえけんうえのし） 安場字西横尾（やすばあざにしよこお）	24206		34度 40分 28秒	136度 6分 42秒	19940516～ 19940525	200	国道368号線道路改良事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西横尾遺跡	その他	鎌倉時代後期	土坑　2基 石組み　1基	陶器片口鉢、瓦器椀、青磁椀、土師器皿、土師器羽釜	

平成7(1995)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　130

一般国道368号線道路改良事業に伴う

西　横　尾　遺　跡

1995(平成7年)3月

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　光出版印刷株式会社